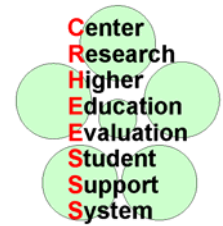


# 週刊センターニュース No.33



第33号(2004年10月25日)毎週月曜日発行  
発行: 金沢大学 大学教育開発・支援センター  
URL: [http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou\\_rche/index.htm](http://www.kanazawa-u.ac.jp/faculty/daikyou_rche/index.htm)

## 共同学習会のご案内

第42回 日時: 10月26日(火) (14時40分 ~ 16時10分)

場所: 角間キャンパス総合教育棟南棟2階 大会議室

講師: 青野 透(大学教育開発・支援センター)

題目: 「学生実態調査について その2」

## 本学イーラーニング研究会と第43回共同学習会との第2回合同研究会

日時: 10月28日(木) (16時20分 ~ 17時50分)

場所: 角間キャンパス総合メディア基盤センター2階 プレゼンテーション室

講師: 太田亨助教授, 三浦香苗教授(留学生センター)

題目: 「インターネットテレビ会議による金大生と協定校学生との  
ディスカッションを正規授業に取り込む試み」(仮題)

## 「就職支援室ニュース」創刊に想う

すでにご承知のように、「就職支援室ニュース」が、10月22日付けを創刊号として誕生しました。学生の就職支援については、全ての教職員が関心をもっていなければならない事項です。当センターも、就職支援室の職員の方々には、角間ランチョンセミナーでミニ講義をお願いするなどしてきました。

どの大学でも、入り口から出口まで学生に十分な配慮をする、すなわち、受験に必要な情報の公開に始まり、分かりやすい授業の実施、課外活動の支援等、核をなす教育活動の充実、そして、就職活動の支援を、多様な資質をもった学生に対して行うことが、当然のこととして求められています。

すでに共同学習会で参加報告しました、「平成16年度メンタルヘルス研究協議会」(主催: 国立大学法人等保健管理施設協議会・文部科学省・独立行政法人日本学生支援機構・国立大学法人東京工業大学)でも、学生支援の一つのコアとして就職支援があることは強調されていましたし、やはり共同学習会(10月26日)で参加報告予定の、「第42回全国学生指導研究集会」(主催: 文部科学省、他)でも、当然のことですが、13の分科会のうち3つが就職支援であり、他の分科会でも関連した議論が行われました。

大学によっては、教員をはりつけて、就職支援センターを発足させる時代です。私立大学では、就職支援を学生が学業において頑張る動機付けを高めるために位置づけることは当たり前のようになっています。

法人化された金沢大学において、各部署が、それぞれに学生のために努力していることを広くニュースとして情報公開し、抱えている問題の解決に相互に協力しあうという動きは、非常に大切なものと考えます。

「就職支援室ニュース」の創刊を一教員として喜び、このニュースを通じて、本学の就職支援活動の一層の充実がもたらされることを期待します。(文責 青野)

## 学生をつかむ授業 雑誌「化学」の記事から

雑誌「化学」の10月号に、「学生をつかむ講義術」という特集が組まれていたので、紹介したい。執筆者が口を揃えて指摘するのは、授業者から学生へ一方的に知識を伝える講義ではなく、教員と学

生、学生と学生の間での質問や議論を組み込んだ双方向、多方向の授業の重要性である。大げさに考えることはなく、一人でも多くの学生と目を合わせ、授業後の意見や批判、質問を書かせ、それらに答える、グループ討論をさせる、自分の立つ位置を教室の一番うしろに変えて、黒板の課題と一緒に考えるという姿勢を学生に見せるだけで、学生の「お客さん意識」が大きく変わるなど、執筆者の体験に基づいた「学生とともに作る授業」の実践について意見が述べられている。双方向、多方向を進めていくと、最低限知識として伝えるべき学習事項を厳選する必要性が生じると思われる。「自ら主体的に学び、考え、柔軟かつ総合的に判断できる能力等の育成」(大学審議会答申1998年)が大学教育の到達目標であるとするれば、双方向、多方向授業を設計する上で、何を最低限の授業素材とするかについて十分な検討が必要である。

双方向、多方向の授業のノウハウも含めて、講義のノウハウを共有しようとするFD活動などが本学も含め多くの大学で近年活発に行われている。教員の日々の教育活動におけるヒントやノウハウをまとめた「ティーチングチップス(teaching tips)」は、アメリカでは50年以上の歴史がある。名古屋大学版ティーチングチップスは、「成長するチップス先生」としてよく知られている。特集の中で、中井俊樹先生(名古屋大学高等教育研究センター)は、「チップス先生」を通して最も伝えたいメッセージは、教員の授業での俳優としてのスキルも大切だが、それ以上に講義全体の設計スキルを磨くことであると述べている。何を素材として選び、それをどう授業に組み込んでいくかである。同じ素材を使うにしろ、通常の一方向の講義よりも、双方向、多方向の授業を設計することは、さらに一段高度な作業に思える。

私もどのような授業が最適かと考えてみる。自然科学の授業としては、現象や実験にまず触れさせた上で、それを基にした十分な議論によって能動的な思考を促すことが有効と思える。誰もがそう考えと思うが、時間的制約、学生の限られた予備知識という条件の下で、最低限伝えるべき事柄を選定し、議論型の授業を組み立てることは、決して容易なことではない。特集の中で特に印象深かったのは、北海道大学高等教育機能開発総合センターの小笠原正明先生と本学理学部の田崎和江先生の記事である。現象や実験に基づいた双方向、多方向の授業を行う取り組みがすでに行われている。

小笠原先生によると、大学における化学の授業では、示範実験をするのが慣例であったという。ファラデーが活躍した王立協会は研究機関であるとともに、科学の啓蒙のために大衆の求めに応じて実験してみせるエンターテイメント・センターでもあった。時代を経て、今では受験勉強のプレッシャーが化学を「座学」に変え、無味乾燥な穴埋め問題にしてしまったと述べておられる。北海道大学での取組が紹介されている。理学研究科化学専攻の鈴木孝紀教授と谷野圭持助教授は、小グループ討論を組み込んだ授業を始めている。90分のうち最初の60分は、デモンストレーション実験を含む授業を行う。残りの30分では、学生はグループに分かれて、その日の授業や宿題に関するテーマについて討論するという。どのような実験テーマが選定されているか非常に興味深い。

本学の田崎先生は、授業では、身近でホットなテーマを取り上げて学生とともに「研究」として述べておられる。教科書は一切使わない。イラク戦争直後の大学屋上での雨の酸性度、高層天気図、雨のなかの煤などを分析したり、ナホトカ号重油流出事故後の重油の分析や重油中から重油分解細菌を分離するなど、まさに教科書にはない答えを探す「研究」を行う。結果を、十数名の連名で学会誌に投稿しているというから驚きである。授業で学生とともに「研究」を行うというこの斬新な取組は、先進的な教材開発の実践例でもあり、全国の大学に誇れるものである。

当センターは、11月28日(日)に第1回専門分野別教育開発セミナー「研究と教育の接点を探る」を開催する。今回、化学、生物の分野から数名の学内外の講演者をすでにお願している。貴重な教育リソースでもありうる研究成果をどう授業に組み込むことができるかについて議論できたらと考えている。田崎先生の取組は、一つの答えを与えているように思える。(文責 西山)